

富山大学人文学部令和3年度卒業論文

子ども食堂の現状と課題
ー富山県内の子ども食堂調査を通してー

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11810115
氏名 原田穂乃香

目次

第1章 問題関心	1
第2章 子ども食堂の概要	2
第3章 先行研究	4
第1節 子ども食堂の類型化及び多世代交流拠点としての子ども食堂	4
第2節 子ども食堂と居場所	6
第3節 複合機能をもつ「こども食堂」と社会福祉	7
第4節 まとめ	8
第4章 調査概要	9
第1節 調査日程	9
第2節 各子ども食堂の概要	12
第5章 分析	14
第1節 子ども食堂開設のきっかけ	14
第1項 食に現れる経済的貧困、虐待	14
第2項 子どもの孤独、地域の繋がり希薄	14
第3項 開催場所ならではの理由	15
第4項 まとめ	15
第2節 子どもの経済的貧困との関わり	16
第1項 オタヤこども食堂の場合	16
第2項 にながわふれあい子ども食堂の場合	16
第3項 芝園子ども食堂の場合	17
第4項 まとめ	17
第3節 子ども食堂での「食事」	19
第1項 オタヤこども食堂の場合	19
第2項 にながわふれあい子ども食堂の場合	19
第3項 芝園子ども食堂の場合	19
第4項 がんかいじこどもしょうどうの場合	20
第5項 まとめ	20
第4節 子どもの居場所と経済的貧困に限らない子どもの課題	22
第1項 子どもの居場所機能	22
第2項 経済的貧困に限らない子どもの課題	22
第3項 まとめ	23
第5節 子育て支援機能	25
第6節 子ども食堂の地域共生の側面	27
第1項 にながわふれあい子ども食堂の場合	27

第2項 芝園子ども食堂の場合	28
第3項 まとめ	29
第7節 運営における課題	30
第1項 オタヤこども食堂の課題点	30
第2項 にながわふれあい子ども食堂の課題点	30
第3項 芝園子ども食堂の課題点	31
第4項 がんかいじこどもしょうどうの課題点	32
第5項 まとめ	32
第6章 考察	33
第1節 子どもの貧困対策としての機能	33
第2節 子どもの居場所、子育て支援機能	35
第1項 子どもの居場所	35
第2項 子育て支援機能	35
第3節 地域共生を実現する場としての機能	37
第4節 現在・今後の課題	38
第1項 人材不足	38
第2項 財政不足	38
第3項 情報不足	39
第5節 多様な子ども食堂と今後の展望	41
注	42
参考文献・URL	43

第1章 問題関心

厚生労働省の2019年「国民生活基礎調査」によると、2018年時点で子どもの貧困率（注1）は13.5%である。これは、前回調査の2015年時点での子どもの貧困率13.9%と比較し0.4%減少したものの、依然として子どもの7人に1人が貧困状態にあるという結果だ。また世帯類型別でみると、大人1人で子どもを育てる世帯の貧困率は48.1%に上る。子どもの貧困率は2000年以降13～16%台で推移しており、抜本的な改善はされていない（日本経済新聞 2020年7月17日）。政府は2014年1月16日に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を施行しており、2019年9月7日に一部改正した法律を施行している（子どもの貧困対策 内閣府）。このような状況の中、子どもの貧困対策として近年注目されているのが「子ども食堂」である。

子ども食堂の数は2016年5月末時点で少なくとも319か所（朝日新聞 2016年7月2日）と言われていたが2020年には全国、5086か所で開かれていることが分かっている（むすびえ 2020）。このように、近年急激に増加した子ども食堂だが、貧困対策以外の面も持ち合わせていると考える。そこで、本研究では富山県において子ども食堂はどのような役割を果たしているのかについて、現状を調査していきたい。なお、子ども食堂の表記は複数あるが（こども食堂、子供食堂等）、引用部分以外は本報告書では「子ども食堂」とする。

第2章 子ども食堂の概要

子ども食堂については明確な定義づけがされている訳ではないが、「子ども食堂」の名付け親とされ、気まぐれ八百屋だんだんを運営している近藤博子は、「こども食堂とは、子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」であることが唯一の定義であるとしている（湯浅 2017）。この定義は様々な先行研究において紹介されている。

NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえが2020年10月から12月にかけて行った「こども食堂全国箇所数調査2020」によると、2019年に3718箇所であった子ども食堂の数は、2020年に少なくとも5,086箇所に達したとある（むすびえ 2020）。年別グラフは以下の通りである（図2-1）。

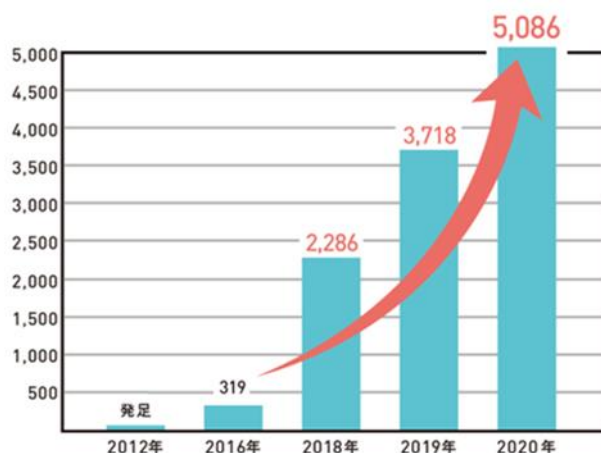


図2-1 全国の子ども食堂数（出典：むすびえ，2020）

この「こども食堂全国箇所数調査 2020」によると、富山県内の子ども食堂の箇所数は全国で46番目の22箇所である。（2021年9月時点で富山県子どもほっとサロンネットワーク（後述）に加入している団体数は24団体）また、県下の小学校数に対するこども食堂のある小学校数の比率を指す真の充足率（こども食堂のある小学校数÷小学校数×100）に関しても、全国38位、12.02%と高い数字ではない。

富山県では県内の子ども食堂の取組みや支援の輪を広げることを目的に、団体間の交流や情報共有、意見交換を行う「富山県子どもほっとサロンネットワーク」が平成30年度から設立されている。このネットワークでは、年に2回の交流会が実施されている。県の子ども支援課では、市町村から上げられた情報を得てネットワークへの参加の希望有無を聞くが、加入は任意であるため無理に勧めることは無い。また、ネットワークに加入するにあたって基準等はなく、申請書を提出すれば加入することが出来る。

県は子ども食堂への支援策として、子ども食堂の開設時の立ち上げ経費に関して補助金（20万円）の助成制度を実施している（県と市町村で半額ずつ）。また、新型コロナウイ

ルス流行禍において、「とやまっ子エールごはん緊急支援事業費補助金」（最大 55 万円）の取り組みも行っている。

第3章 先行研究

第1節 子ども食堂の類型化及び多世代交流拠点としての子ども食堂

第2章で述べたが、子ども食堂はまだ歴史の浅い活動であり、ここ数年で急激に数が増加したものである。また明確な定義が存在していないため、様々な形の子ども食堂が点在している。湯浅（2017）は子ども食堂が急速に広まっていったために、子ども食堂への混乱や戸惑いが生じているとし、子ども食堂を対象者と目的の2つの軸によって4つに分類した（図3-1）。4つの分類に分けたが、大多数の子ども食堂は以下に述べる2つの型に分けられると湯浅は述べる。対象者を限定せず、地域交流に軸足を置く「共生食堂」（B型）と、貧困家庭の子どもを対象とし、課題発見と対応に軸足を置く「ケア付食堂」（D型）である。A型、C型については派生型およびレアケースとしているため、注で表記するだけとする（注2）。

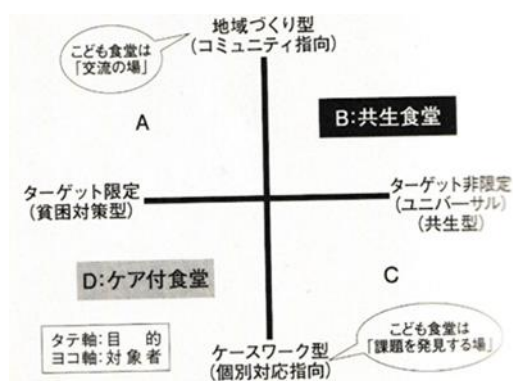


図3-1 子ども食堂の類型（出典：湯浅，2017，77頁）

また、湯浅は2019年にネット記事で多世代交流拠点としての子ども食堂について5つの価値と役割を述べている。それが以下である。

多世代交流拠点の5つの価値（バリュー）

- ① にぎわいづくり（地域活性化）
⇒地域交流の場
- ② 子どもの貧困対策
⇒経済的貧困のみならず、心の貧困対策
- ③ 孤食対策
⇒「孤食」だけでなく、「個食」、「固食」、「濃食」、「粉食」、「小食」の解消。
- ④ 子育て支援、虐待予防
⇒お母さん達がほっと出来る場所。
- ⑤ 高齢者の健康づくり
⇒子どもを中心に会話が広がる。

湯浅は多世代交流拠点としての子ども食堂は人をタテとヨコで分けない活動であるから、多様な価値が生まれる空間になるとしている。

第2節 子ども食堂と居場所

第1節では、湯浅の子ども食堂の類型、多世代交流拠点としての子ども食堂の特徴をみてきた。子ども食堂が様々な形で存在していることと、子どもの経済的貧困の対策としての側面のみでない子ども食堂の意義を確認した。本節では、子ども食堂を子どもの居場所として考察した七星（2019）の論文を取り上げる。七星は「子ども食堂」を子どもの貧困問題の面からのみ考察するのではなく、「子ども食堂」と「居場所」を結び付けて、これまでの「居場所」研究と比較しどのような特徴があるのかを整理している。「子ども食堂」がこれまでの居場所と異なる点として「子どもの貧困」があり、学びや遊びを享受するための生活の部分への支援が加わったことを指摘している。また、経済的な貧困やひとり親家庭の子どもなど困難を抱えている子どもだけに限らず、経験や関係性の乏しさが指摘され、あらゆる子どもが対象となったとしている。七星は「子ども食堂」という「居場所」は、子どもたちへの食を通じた生活支援の場であり、豊かな経験と多世代との交流が生み出される、「居場所」であるとしている。

第3節 複合機能をもつ「こども食堂」と社会福祉

第1、2節と子ども食堂の貧困対策機能のみでない役割についてみてきたが、最後に子ども食堂を社会福祉的な側面から捉えた阿部（2020）の論文を取り上げる。阿部（2020）ではまず、内閣府主導の「子どもの貧困」対策からのアプローチ、農林水産省主導の「食育」からのアプローチ、厚生労働省の「地域共生」という観点から、子ども食堂の社会的意義が確認され、支援されていることを概観している。これらを踏まえ、5つの子ども食堂に対しインタビュー等を行った上で、子ども食堂の社会福祉的な6つの機能について論じている。それが以下の6つの機能である。（）内は、第1節・2節と重なる部分である。

- ①子どもの貧困対策としての機能（湯浅）
- ②子どもの居場所としての機能（七星）
- ③子育て中の親らに対する子育て支援の役割（湯浅）
- ④高齢者の生きがい・健康づくりに資する点（湯浅）
- ⑤地域共生を実現する場としての機能（湯浅・七星）
- ⑥①～⑤を包括するように、社会的排除の予防機能を果たす点…「つながり」、「役割」、「居場所」の3点が重要

この6つの観点を踏まえた上で、阿部は以下のようにまとめている。

こども食堂は子どもの貧困対策・居場所づくりを中心として、その保護者たちの子育て支援、高齢者の生きがい・健康づくり、地域共生、地域活性化、孤食対策、企業の社会貢献、大学生の地域における学びの場等様々な機能を備えた場となっている。

子ども食堂が多様な機能を持ち合わせている場だということが推測される。課題に関しては、財源・人材・情報不足のいずれかあるいはいくつかを課題に抱える子ども食堂が少なくないとしており、この3つが今後の課題であるとしている。

第4節 まとめ

湯浅は多世代交流拠点としての子ども食堂を、七星は子どもの居場所としての特徴を、阿部は社会福祉的な面から見た6つの機能をそれぞれ挙げていた。阿部の6つの機能を簡単に分けると、①は子どもの貧困対策としての機能、②と③は貧困対策ではないが子どもに関する機能、④と⑤は子ども以外への機能とまとめることが出来ると思う。

これらの先行研究を踏まえ、子ども食堂は大きく分けて、①子どもの貧困対策としての機能、②子どもとその親に関する貧困対策以外の機能、③子どもに限らない地域全体の交流機能として捉えることが可能であると思う。本研究では、富山県内で開催されている子ども食堂へのインタビュー等を通し、富山県内での子ども食堂が果たしている機能や課題について検討していきたい。

第4章 調査概要

第1節 調査日程

富山県内の子ども食堂がどのように運営されているのかを調査するため、アンケートやインタビューなどを行った。以下がその詳細である。

【研修会】

・令和2年度子ども食堂に係る研修会

開催日時 2020年10月26日（月）13：45～15：45

場所 富山県民会館701号室

対象 子ども食堂の開設を考えている個人・団体

子ども食堂を応援したい個人・団体

子ども食堂を既に開催している団体 等

主催 富山県厚生部子ども支援課

【アンケート調査】

・富山県内子ども食堂に対するアンケート調査

調査日時：2020年11月11日～

回答団体：13団体（内一件は電話での調査）

概要：2020年11月時点において富山県子どもほっとサロンネットワークのホームページにメールアドレスの記載があった、21の団体に対し Google フォームでのアンケート調査を行った。アンケートを作成するに当たって、農林水産省が平成29年10月17日～11月15日の1ヶ月間に渡って全国の子ども食堂の運営者を対象に行った「子供食堂向けアンケート」調査を参考にした。

調査項目：運営形態、スタッフの構成、開催場所、運営費の内訳、参加費、開催頻度、広報方法、参加者の内訳、参加人数、運営目的、運営課題、コロナ禍における対応（自由形式）、インタビュー調査の可否

研修会及び、アンケート調査を参考に、インタビュー調査及びフィールドワーク調査を行った。

【インタビュー調査】

・オタヤ子ども食堂

日時：2020年12月18日（金）

録音時間：1時間56分55秒

場所：田辺さんの職場

概要：オタヤ子ども食堂の田辺恵子さんと高澤満里子さんへのインタビュー調査。

・にながわふれあい子ども食堂

日時：2020 年 12 月 20 日（日）

録音時間：2 時間 18 分 55 秒

場所：富山大学人文学部社会学端末室

概要：にながわふれあい子ども食堂の田畑亜矢さんへのインタビュー調査。

・芝園子ども食堂

日時：2021 年 10 月 13 日（水）

録音時間：2 時間 52 分 32 秒

場所：せきの屋工場（芝園子ども食堂開催場所）

概要：芝園子ども食堂の前川京子さんと浅野加津子さんへのインタビュー調査。

・がんかいじこどもしよくどう

日時：2021 年 10 月 14 日（木）

録音時間：1 時間 36 分 30 秒

場所：富山市清水町願海寺

概要：がんかいじこどもしよくどうの村上巧弦さんへのインタビュー調査。

【フィールドワーク調査】

・にながわふれあい子ども食堂、1 回目

日時：2020 年 12 月 19 日（土） 9：30～14：30

会場：富山市蜷川地区センター

・にながわふれあい子ども食堂、2 回目

日時：2021 年 10 月 24 日（日） 9：00～14：20

会場：蜷川小学校体育館、グラウンド

参加者数：大人 154 名、子ども 240 名、ボランティアスタッフ約 60 名

・にながわふれあい子ども食堂、3 回目

日時：2021 年 11 月 27 日（土） 9：00～14：30

会場：富山市蜷川地区センター

・がんかいじこどもしよくどう

日時：2021 年 11 月 19 日（金） 16：00～21：30

会場：富山市願海寺

・芝園子ども食堂

日時：2021 年 11 月 20 日（土） 9：30～12：30

会場：せきの屋工場

第2節 各子ども食堂の概要

本節ではインタビュー調査を行った各子ども食堂の概要について、以下の表でまとめる。

(表 4-1)

	オタヤこども食堂	にながわふれあい 子ども食堂	芝園子ども食堂	がんかいじこども しょくどう
設立・開催	2015年11月設立 2016年2月13日開始	2019年5月1日設立・2019年8月24日開始	2017年8月19日開始	2019年5月開始
運営スタッフ	無償ボランティア	無償ボランティア	無償ボランティア	無償ボランティア
スタッフの内訳	地域住民 大学生 高校生	地域住民	地域住民	地域住民
開催場所	御旅屋セリオ6階	蜷川地区センター	せきの屋工場	願海寺
開催頻度	ひと月に2回 (第2, 4土曜日)	ひと月に1回 (第4土曜日(原則))	ひと月に1回 (第3土曜日)	ひと月に1回 (金曜日夜)
参加費	子ども：無料 大人：300円	子ども：無料 大人：300円	子ども、75歳以上：無料 大人：300円	子ども：無料 大人：500円
参加人数	200人以上	100人～150人	30人～50人	30人～50人
広報	Facebook	Facebook、 Twitter 、Instagram 等	Facebook、 回覧板 等	LINE、Twitter、 Instagram 等
県ネットワークへの加入の有無	○	○	○	×

表 4-1 各子ども食堂の概要

今回インタビュー調査を行った4つの団体はいずれも開催から2年以上運営を継続している団体である。オタヤこども食堂は富山県内で初めて開設された子ども食堂であり、芝園子ども食堂は富山市内で初めて開設された子ども食堂である。4つの子ども食堂全て無償ボランティアスタッフによって運営されている。開催頻度に関してはオタヤこども食堂のみが月2回の開催であり、その他3つは月1回の開催である。開催規模に関しては、大

規模なものから小規模なものまで様々である。また、子どもの料金に関してはいずれも無料としていた。広報に関しては、4つの団体全てがいずれかの SNS を利用している。

第5章 分析

本章では、アンケート調査並びにインタビュー調査で得られたデータを基に、開設のきっかけから現状の課題まで様々な観点ごと見ていく。

第1節 子ども食堂開設のきっかけ

本節では子ども食堂を開設するに至ったきっかけについてみていく。

第1項 食に現れる経済的貧困、虐待

「子ども食堂」の名づけ親とされている近藤博子さんが自身の子ども食堂である「気まぐれ八百屋だんだん」を開設したきっかけは、朝ごはんや晩ごはんを当たり前で食べられていない子どもの存在を知ったことであった（湯浅 2017）。今回調査を行った富山県内で開催されている子ども食堂においても、子どもが食事を十分に食べられていないといったことがきっかけとしてあることが分かった。

オタヤ子ども食堂代表の田辺さんと高澤さんは民生委員を務めており（田辺さんは現在も）、その民生委員の仕事をする中で高澤さんは十分にご飯が食べられておらず、虐待を受けていた子どもが最終的には里親に出されたという経験をし、この出来事が心の中に残っていた。そんな思いを抱えている中、田辺さんから子ども食堂というものの存在を聞き、自分達にもこういう形でなら出来ることではないかということが立ち上げのきっかけであった。

にながわふれあい子ども食堂代表の田畑さんは、子ども食堂を立ち上げたいと思ったきっかけが2つあり、その1つが自身の仕事の関係で満足に食べられていない小学生、中学生、高校生を立て続けに見たことだと語る。

芝園子ども食堂代表の前川さんは、お孫さんの友達に十分にご飯を食べられていない感じの子どもがおり、前川さんのお家に遊びに来た時も、何も口にすることが無かったという経験を語った。その経験から子どもが気兼ねすることなく、ご飯を食べることが出来る場所が無いかなと思っていた時に、テレビで子ども食堂のことを見聞きし、興味を持ったのがきっかけである。

第2項 子ども、地域の繋がり希薄

第1項では、立ち上げのきっかけの背景として、子どもが満足にご飯を食べられていないことをみてきたが、きっかけはそれだけではない。本節では子どもの孤独や、地域の繋がりに関する面からのきっかけについてみていく。

オタヤ子ども食堂の田辺さんは自身の幼少期や子育て期と比較し、現在は近所との関りが殆ど無い状態であると気づき、子ども食堂の開催によって交流の場を作ることで気持ち的に楽になるお母さん達がいるのではないかという思いがあったという。特別なことをする思いではなく、自分達が子育てした時のまま出来るのではないかと語っていた。

にながわふれあい子ども食堂の田畑さんは、自身の子どものことが立ち上げのもう 1 つのきっかけとなっている。田畑さんの子どもは地域の小学校の支援学級、情緒級に通っているのだが、「私は友達がいない。」ということを書いてきたのだという。週の半分以上は通常学級に勉強しに行っているのに、子どもがそんな感覚でいることを実感し驚いたという。そこで、自分の住んでる地域に誰でも集まる事が出来て、みんなでご飯をお腹いっぱい食べることが出来る、過ごせる場所を作れば良いなと思ったのがきっかけであるという。

がんかいじこどもしよくどうの村上さんは、知り合いの民生委員の方から両親が夜、家にいないために 1 人でコンビニでご飯を買って食べている子どもがいるという話を聞き、それを放っておけないなと思ったことがきっかけの 1 つであるという。

第 3 項 開催場所ならではの理由

第 1 項、第 2 項と子ども食堂の立ち上げのきっかけについてみてきたが、開催場所または団体の事情がきっかけになっている事例もあった。

がんかいじこどもしよくどうは、浄土真宗本願寺派のお寺である願海寺で開催されている。お寺として問題になっていることとして寺離れがあり、その原因として、お寺が閉ざされてしまっていることが原因にあると思うと村上さんは語っていた。そこで、仏教という宗教としても布施ということがあり、お寺の空間を使って何か出来ないかと考えたとき、子ども食堂が良いのではないかと思ったのが、最初のきっかけであるという。

第 4 項 まとめ

第 1 項から第 3 項まできっかけに着目してみてきた。子ども食堂は子どもの経済的な貧困や虐待といった子どもの抱える問題に対して、地域住民有志が何か出来ないかと考えた上での活動であるのではないかと考えられる。また、子どもの経済的な問題だけでなく、地域内での交流の希薄化や、子どもが孤食をしているなどの経済的貧困に限らない課題に対しての解決策の 1 つでもあるのではないかと考える。また、第 3 項で述べたようなきっかけも存在している。子ども食堂は様々なきっかけから生まれていることが分かった。

第2節 子どもの経済的貧困との関わり

第1節では、子ども食堂の立ち上げのきっかけをみてきたが、その中にも子どもの貧困との関わりが見られた。本節では、子ども食堂の中で現れる子どもの貧困を具体的な話を中心にまとめていく。

第1項 オタヤ子ども食堂の場合

インタビューの中でいくつか貧困と関係のあるエピソードを聞くことが出来た。本項ではそのいくつかのエピソードを語りと共にまとめていく。

子ども食堂の運営当初は生活困窮家庭の子どもは本当にいるんだろうかという気持ちがあり、実際に来ている子どもがそういう家庭か分からなかったというが、人づてにそういう家庭の子どもが子ども食堂に来ていると知る事があったという。以下がその語りである。

高澤さん：母子家庭なんだけど、お子さん2人いらして、それこそバジヤマも買えないで、体操服のまんまで寝て、体操服のままで登校するというような方がいらっしゃるそうです。「毎回楽しみに行くとられんがみたいよ。」ってそれを人づてに聞いたんだけど、そういう方も利用しているんだなど。

服を十分に買うことが出来ていない家庭の子どもが子ども食堂を楽しみにしていることが分かる語りである。また、季節に合わない服を着ている子どもが子ども食堂に来ていることもあり、個人情報や家庭の事情について尋ねていないため理由は分からないというが、貧困が見え隠れするという。

また、以下のようなエピソードもあった。

田辺さん：それでね、まあ子どもは無料なんです。で付き添いの大人は300円なんですけども、あの「大人は食べてきたから良いんです。子どもだけお願いします。」って言われる。

高澤さん：で子ども何回もお替りして、それをその親御さんが食べられるパターンもあるの。でも私達は、それを別にほら止める訳にもいかないし、「や、食べてたじゃない。」って咎める訳にもいかないし。

大人の300円を払わずに子どものものを親が食べているという話であった。これらのエピソードはいずれも子どもの経済的な貧困と子ども食堂の繋がりを強く感じるものである。

第2項 にながわふれあいこども食堂の場合

子ども食堂での印象的だった出来事について聞いた際、子どもの貧困と関係するエピソードがあった。以下は、田畑さんの仕事の関係で繋がっている人が連れてきた子どもの話

である。

田畑さん：兄弟だったんですけど、まあびっくりするくらいご飯を食べて小学校低学年くらいの子だったんですけど、ものすごいご飯を食べた。で、おいしいって言いながら食べて、おかわり持ってこようとか言うのと、でもお兄ちゃんは弟に譲るがんです全てを。私が持ってくる全てを。それを見とるときに、ほんとにこんな子たちおんがやったらもっと回数も増やしたいし、ほんとに出来ることやっていきたいなってもものすごく思いました。

この語りの後には、支援している人がファミレスに連れて行っても遠慮して頼むということが語られており、子ども食堂では気兼ねすることなくご飯が食べられるのではないかと考えられる。また、やって来た兄弟はご飯を食べた後も遊んでいったそうなのだが、帰りの車の中で、「この子ども食堂が1番好き。また来たいな。」という言葉を支援している人に言ったという。ご飯を十分に食べられていない子どもが、子ども食堂では遠慮することなくお腹いっぱい食べられ、楽しく過ごすことが出来たことが分かる。

第3項 芝園子ども食堂の場合

子ども食堂で印象的だった出来事を聞いた際、ひとり親家庭の方から「子どもに十分食べさせられました。」といった意見を聞いたことを挙げていた。また、「子どもにお腹いっぱい食べさせてあげたい。」と言ったお母さんの声も聞くという。

また、他にも普段ご飯を食べられていない子どもが子ども食堂に来た時の語りもあった。それが以下である。

前川さん：何せ普段そこんちはネグレクトでご飯ほとんど食べてない状態。かわいそうだからって来たら、もりもり食べてくの。

浅野さん：何回もお替りしてたね。

前川さん：「あんたお腹大丈夫？」っていう程食べていくんだけど、で果物なんか食べたことないから、「ごめんね、こんなにいっぱい食べちゃって。」っていうから、「良いんだよ。」って言って。

普段ご飯を十分に食べられていない子どもが子ども食堂でたくさんご飯を食べていた話であった。子ども食堂がネグレクトなどの問題に直接関わることは難しいかもしれないが、やってきた子どもに思いっきりご飯を食べさせてあげることは出来ることが分かる。

第4項 まとめ

3箇所の子どもの食堂における経済的貧困や虐待によってご飯が十分に食べられていない子どものケースを見て来た。このことから、子ども食堂において様々な子どもがやって来

ている中に、課題を抱える子どももやって来ていることが分かる。一人一人の子どもに対して深い支援を行っている訳ではないが、十分に食べられていない子どもに対してご飯を食べさせることは、貧困支援になっていると言えるだろう。

第3節 子ども食堂での「食事」

第1節・第1項で述べたが、「子ども食堂」は、子どもがご飯を食べられていないことが立ち上げのきっかけの大きな要因になっている。しかし「ご飯」と言っても、ただ単に何も考えず食事を提供している訳では無い。本節では、各子ども食堂が食事に対してどのような意識を持っているのか見ていく。

第1項 オタヤこども食堂の場合

子ども食堂のメニューは代表の田辺さんと高澤さんが考えている。献立は季節に合ったものを作ろうと心掛けていているという。(ひな祭りならちらし寿司とすまし、七夕ならそうめんと何か。秋にサツマイモご飯。お正月にはお雑煮、5月には筍ご飯等) また、高澤さんの語りの中で、最初のうちは子どもの好きなカレーやコロッケなどを出していたが、食育も大事なのではないかという声から、なるべく地場のものや、富山の郷土料理を取り入れるようにもなったという。また、そういう料理を出した時には若いお母さん方には珍しいからなのか、おかわりをしてくれたり残さず食べてくれることから、食育も自分達が伝えていかなければいけない役割なのではないかと思うと語っていた。

また、子どもの食べ物の好き嫌いに関しての語りが以下である。

田辺：何よりも好き嫌いがあるでしょ。この子が食べるとこの子も食べるんです。嫌いなのに。「何とかちゃん食べれるがだ〜！」って言うと、僕も食べられる。だから、「ほんとにありがとうございます。」っていうお母さんもいらっしゃいました。(中略) 嫌いだからといってよかしてた子が、何とかちゃんは人参も食べてるんだ。自分も食べた方が良くかなと思うかもしれないし、で、食べたことによって褒められるじゃないですか。やっぱり褒められると嬉しいみたいですよ。

子ども食堂では、家族だけではなく沢山のひとと一緒にご飯を食べる。普段は食べない苦手な食べ物であっても、周りの子どもが食べている様子を見たり、周りの大人に褒められることで食べることが出来るようになっていっているのではないかと考える。

第2項 にながわふれあい子ども食堂の場合

メニューに関しては地域で収穫された野菜を中心に考えられている。また、アンケートからは、食育に関する意識が高いことが分かっている。インタビューでは、鰹節を削り、削りたてのものを食べるという体験を子ども達が楽しんでやっていたということを語っていた。このことから、今後も何かしら食育に繋がるようなことをしていきたいと語っていた。

第3項 芝園子ども食堂の場合

芝園子ども食堂で使用しているのは無農薬栽培で育てられた野菜である。そのため、一緒に調理するものも、添加物の少ないものを選びたいと語っていた。野菜の調理方法も様々工夫をし、野菜中心のメニューにしているという。

食べ物の好き嫌いという観点では、前川さんのご主人が野菜を食べない人だったそうだが、子ども食堂において、「前川さん、野菜美味しいでしょ！美味しいでしょ！」と周囲の人が声をかけることで、野菜を食べるようになったという。周囲の目や残したら怒られるのではないかという思いがあるのではないかと語っていた。

第4項 がんかいじこどもしよくどうの場合

がんかいじこどもしよくどうでは、「いただきます」をみんなで一齐に行うのだという。これは、今回調査した他3つの団体では行われていないことである。また、「ごちそうさま」の挨拶も行っており、食事の際のマナーを学ぶ場にもなっていると考えられる。また、メニューに関しては、オリジナルの甘口スパイスカレーをこだわって作り続けており、子どものみならず、子ども達のお母さんが毎月楽しみにしているといった語りがあった。11月の子ども食堂に参加した際は、「今週は子ども食堂があるから、カレーは作らないようにしていた。」などというお母さんの声を聞くこともあった。メニューをカレー1つにしている理由として、上述したように一齐に「いただきます。」をするため、なるべく早く配膳が出来るようにということがある。また、メニューがカレーとなったのはスパイスカレー作りが村上さんの趣味であったことも理由の1つであるが、子ども達からは、カレー以外のものも食べたいという声があるという。それに対し、村上さんは以下のように考えているという。

村上：素麺してとかね、ラーメンしてとかね、ハンバーグが良いとか出るんですよ。「ええまたカレー？」みたいな。カレーにこだわっているというか、大人の方が私も含めて、カレーが名物みたいに大人の方がしちゃってるんですけど、でもそれもね長いスパンで物事を考えたときに、この1年間とか、例えば小学校6年生までとかそういうことじゃなくて、今小学校低学年とかの男の子女の子が大人になったとき、30歳、40歳、50歳になったときに、あっ、子ども食堂で毎月カレー食べてたなみたいな、味の記憶みたいなので残ると思うんですよ。そこは一貫したもの、貫くもの持たせたくなって、それはやっぱカレーやなって思ってるんです。

このことから、カレーである事にこだわり、子ども達が大人になった時の思い出になるという風に捉えていることが分かる。

第5項 まとめ

各子ども食堂では、それぞれ提供する食事にこだわりを持っていた。また、苦手なものに挑戦したり、食事のマナーを身に付ける場にもなっていることが分かった。加えて今回インタビューを行った 4 箇所の子ども食堂ではボランティアスタッフが調理した、手作りのご飯を提供していた（注 3）。ボランティアスタッフの中に食生活改善推進員の人がいる子ども食堂もあり、栄養バランス等を考えて作られていると感じた。

第4節 子どもの居場所と経済的貧困に限らない子どもの課題

本節では、子どもがご飯を食べられる場所である「子ども食堂」が持つ、ご飯を食べること以外の側面や子どもを限定していないことについてみていく。

第1項 子どもの居場所機能

本項では、子どもの居場所機能に関する点に着目する。

にながわふれあい子ども食堂では、スタッフの子どもも子ども食堂のボランティアに参加している。田畑さんの娘さんは、子ども食堂のお手伝いをしていることをきっかけに、子ども食堂に来ている子ども達と遊ぶことが出来て、知らない子と遊ぶことも割と出来るようになったと語る。このことから、子ども食堂は子どもの居場所となって、子どもの成長に寄与していると考える。その他にも、食事スペースとは別に折り紙や塗り絵などを置いて待ち時間や食事後に過ごすことが出来る場所を新型コロナウイルス流行前には作っており、子どもの居場所づくりに寄与していたと考えられる。簡単な工作が出来るようにもしていたという。

次はがんかいじこどもしよくどうの場合である。がんかいじこどもしよくどうの開催時間は17時～20時までとなっている。ご飯を食べ始めるまで子ども達はお寺の本堂で遊んだり、学校の宿題をしたり自由に過ごす。夜18時に一斉に「いただきます。」の挨拶をし、ご飯を食べ始める。その後2～30分程度たったなら、「ごちそうさまでした。」の挨拶をするようになっている。その後はまだご飯が途中の人は食べ続け、ご飯を食べ終わった子ども達はまたお寺の本堂で遊んだり、置いてある塗り絵や折り紙をしたりする。その後19時半に終わりの挨拶が行われ、20時にはお開きという形である。このように、子ども達はご飯を食べる以外にもお寺の本堂で遊んだり、宿題をしたりなど「食べる」以外のことで時間を過ごしている。2021年11月の子ども食堂に参加した際には、19時頃に子どものお迎えに来たお母さんに対して、「なんでもう来たのー！もうちょっと後で来てよ！」などと言う小学生の男の子がおり、子ども食堂での時間を楽しんでいることを感じる。小学校高学年の子どもの中には、1人で自転車で来て帰る子どももおり、子ども1人で来ても自由に過ごせる居場所となっていると考えられる。

また、オタヤこども食堂では外部の団体の協力を得て子どもが遊べるスペースを作っていたりした。

第2項 経済的貧困に限らない子どもの課題

今回調査した4箇所子ども食堂では、個人情報収集せず（新型コロナウイルス感染症の影響により、住所や電話番号を取得するようになった場合はあった。）、対象とする子どもを限定していなかった。個人情報を得ない理由として、気軽に来てもらえるようにと

いう思いや、個人的な情報を知ったところで何も出来ないからということがあった。このような理由から個人情報収集しておらず、深い支援には至っていないと考えられる。しかし子どもを限定せず、間口を広げることで生まれるメリットもあると考える。にながわふれあい子ども食堂は、第31回富山県ふるさとづくり賞の子育て支援活動部門において大賞を受賞しているのだが、その受賞に際してのコメントの中で、「まずは「だれでもどうぞ」で集まることで、適正な支援を必要とする方ともつながることができると思っています。」という文があった。参加者を経済的貧困家庭の子どもに限らないことで、多様な交流と課題の発見に繋げることが出来ると考えられる。

また、子どもの抱える「貧困」は経済的貧困に限らないことをがんかいじこどもしよくどうの村上さんは以下のように語っている。子ども食堂の目的意識について聞いた際の語りである。

村上：貧困か交流なのかっていうその、なんていうんですかね、どっちかっていう問題では無いと思ってます。やっぱりその貧困っていうのは、金銭面、経済的な貧困ってものは大きいと思うんですけど、だけれどもそのお金、物質的な貧困はもちろんとしながら、心の面での貧困というものも今は大きな問題だと思うんですよ。なのでその核家族化が進んで、特にこの富山の街中はずっととは立山町から出てきたとかそういう所の人が多いと思うんですよ。なのでおじいちゃんおばあちゃんとは一緒に住んでないとか、核家族、家族の人数が少ないっていうことが多いと思うんですよ。そうすると、自分の近しいお父さん、お母さん以外の大人と関わることも、まあ学校の先生とかそれぐらいですよ。なのでそういう心の面での成長っていうものは、やっぱりこう色々な人と関わっていく中でのものだと思うんです。それはやっぱりこういう地域に開かれたみんなが集う場所で交流することによってのものだと思うので、だからその貧困っていうものと交流っていうものは、僕は繋がっていると考えています。どっちかじゃない。

「貧困」が経済的貧困だけではないことは、先行研究においても指摘されており、村上さんも「心の貧困」に対して言及している。子ども達が抱える問題は様々である。全ての子ども達に対して広く門戸を開くことで、限られた子どもだけでなく多くの子ども達にとって子ども食堂が食を通じた成長の場になると考えられる。

第3項 まとめ

第1項では子どもの居場所機能について、第2項では子どもを限定しないことで生まれるメリットについてみてきた。子ども食堂は子どもがご飯を食べるだけの場所ではなく、子どもの居場所となり、子どもが自由に過ごして良い場所になっている。また、生活困窮

家庭に対象を限定しないことで、多様な子ども達が集まり、子ども食堂が経済的な貧困のみならず、「心の貧困」に対しての支援策となる事が考えられる。

第5節 子育て支援機能

本節では、子ども食堂での子どもの親に対する子育て支援機能の側面について注目する。各子ども食堂において、子育て支援機能になっていると考えられるところを見ていく。

最初にオタヤ子ども食堂を取り上げる。オタヤ子ども食堂は客層で多いのが幼児とそのお母さん達である。語りの中で、子育て支援機能であると感じる部分があった。子ども食堂に来ている人に対してどの程度の個人情報を得ているのかといった質問の流れで、田辺さんは、何も聞いていないが、何回もリピートで来ている人に話を聞くことがあると語った。子どもが赤ちゃんの頃から子ども食堂に来ている人に、「おかげ様でおっきくなりました。ここ来させて貰ったおかげで色んな人と知り合ったし、幼稚園も一緒に人も見つかった。」というようなことを言われたことがあるという。また、あるお母さんが「自分がパートに行っている時に、子どもが病気になった時などに助けてもらえるような制度があったら良いのになあ。」というような話を聞いて、調べて出て来たサービスについて情報を伝えたという。このことから、直接個人情報を得て支援をするわけではないが、気軽に話をすることが出来、世間話の中でちょっとした悩みごとについて相談出来るような場所になっていると考えられる。

次はにながわふれあい子ども食堂の話である。インタビュー時に子ども食堂の回数を増やしたいという点について聞いた際、田畑さんは以下のようなことを語っていた。

田畑さん：やっぱり、実際始めてみて、自分の家庭だけを考えても、まあこれが月に2回、3回あったら凄く助かるなあって、子ども育てていく中で、したい仕事もお母さんがしていく中で、間違いなく地域の中でこんな風に気軽に行けて、ご飯を食べられる、で安心して行かせる場所は毎週でもあれば、月に2回でも3回でもあれば嬉しいなあって思ったので実際。

このことから、現状の子ども食堂は月1回であるものの、増えたら助かる存在と捉えられており、地域の中で安心してご飯を食べられる場所である子ども食堂の存在は、子育て支援になっていると考えられる。

芝園子ども食堂では、お母さんが入院している時に、お父さんと子どもが子ども食堂に来て「助かりました。」と言われることがあったという。子ども食堂は、普段食事を作り慣れていないようなお父さんにとって、手作りの栄養満点のものを子どもに食べさせることが出来るといった点で非常に助かる存在であると考えられる。

また、がんかいじこどもしよくどうでは、集まったお母さん達が話をすることが出来る場となっていた。子ども達は子ども達で遊び、お母さん達はお母さん達で話題に花を咲か

せている様子が 2021 年 11 月に開催された子ども食堂に参加した際見られた。お母さん達が友達同士で待ち合わせて子ども食堂に参加する姿も見られ、子どもと一緒にあっても、安心して過ごすことが出来、コミュニケーションが取れる場となっていると考えられる。

第6節 子ども食堂の地域共生の側面

子ども食堂の貧困対策としての側面とは別にもう一つ大きいのが、地域共生の側面である。本節では、その地域共生に関して論じていく。今回調査した4か所の子ども食堂において、地域の方も来られるように開催しているのが、にながわふれあい子ども食堂と芝園子ども食堂である。アンケート調査においても、この2つの子ども食堂は「高齢者や障害者を含む多様な地域の人との共食の場の提供」という項目に対して、「とても意識している。」と回答している。他2つの子ども食堂は、この項目に対しては「どちらかといえば意識していない」と回答している。従って本節ではこの2つの子ども食堂を取り上げる。

第1項 にながわふれあい子ども食堂の場合

にながわふれあい子ども食堂のスタッフは7割程度が蜷川地区の人である。年齢や性別も様々なスタッフ達が調理、運搬、案内などに分かれて活動を行っている。子ども食堂に人がやって来る前の段階として、スタッフ同士の中でも交流が行われ、地域の繋がりが生まれている。実際に子ども食堂ボランティアとして参加した際に、調理場で調理方法についての話をみんなで話しているような様子も見られた。また、高齢の女性がずっと立って作業することは大変であるため、座りながら作業出来るようにしたり、大きなものは男性が運んだりなど、得意不得意なことを作業分担している様子が見られた。スタッフの子どもも子ども食堂のお手伝いをすることもあり、幅広い年代の人がボランティアとして子ども食堂に参加している。スタッフの子どもと会い、笑顔になっている高齢者の方の姿を見ることがあった。

インタビューの中で田畑さんは地域共生が子ども食堂の中で出来ているのではないかと語っており、児童デイサービスの人が子ども達を連れてやって来ることについて語っていた。最初は「あの子らわざわざ呼んだんけ？」と言ってくる高齢者の人もおり、田畑さんが「いやいやわざわざ呼んだんじゃなくて来られたんだよ。」と言うと「あ、そっかあんな障がいに関わる仕事しとんもんね。」みたいなちょっと嫌な感じで言われたことがあったそうだが、最近ではそう言っていた人も児童デイの子ども達に自分から話しかけに行くようになっていて、「凄く良い感じになったな」と思っている。」と語っていた。また、障がいを持つ子ども達が子ども食堂に来ることは、他の子ども達にとっても自然に色んな人と関わる事が出来て良いことなのではないかと語っていた。

この話からは田畑さん自身が、地域共生社会が出来ているんじゃないかと思っていることや、子ども食堂では、普段関わり合いがなかなか無いような人と関わる機会がある事が分かる。

食材に関しても、地域の中でのコミュニケーションを大切にしていることが分かる語り

がある。子ども食堂では、地域でとれた野菜を使っているのだが、この野菜を貰うことに
関しての語りである。

田畑さん：買う事じゃなくやっぱり野菜をもらうこと、貰うためにコミュニケーションを
取ることも、子ども食堂の運営で必要なことだと思ってるので、やっぱ野菜これ欲しい、
あれ欲しいとなんかするのが手間だなあといいながらも、これが地域の中でする子ども食
堂に必要なことだなと思ってやってます。

野菜が貰えるかどうか決まることが直前になってしまうこともあるためメニューが決ま
るのがギリギリになってしまうこともあるというが、買うのではなく、コミュニケーション
を大切にしているという。その他のエピソードとして、赤ちゃん教室で子ども食堂を知
った人が定期的にやって来ることや、近所の90歳近いおじいさんが1人でやって来る居場
所になっていること、不登校の子ども達が外出し、他の子どもと遊ぶ機会になっているこ
となどがあった。

また、フィールドワークにおいて高齢者の方がコロナ禍で外出機会が減った中、子ども
食堂があることで、外に出ていききっかけになり、様々な人と話すことで元気が貰えると
いったものもあった。

第2項 芝園子ども食堂の場合

芝園子ども食堂は、高齢者の方の参加が多い子ども食堂となっている。当初のターゲッ
トとは違うものの、楽しみにしてくれているなら、それでも良いのではないかと捉えてい
る。そのことに関する語りが以下である。

前川：うちの場合は、本来は子ども、特に両親が働いてることか、そういったところが
ターゲットだったんだけど、今は年配の人、ここで食べる時も結構サロンみたいになっち
やったねっていうのがあって（笑）、喜んで来てくれてるって感じ。

浅野：ご近所の人とかお友達の人と一緒に連れだって来られますね。

前川：だから、それでも良いんじゃないって感じで、あんまりその両親が仕事してるから
って来るかって言ったら、来ないから、近所の子でさえ来ないもん（笑）

このように、芝園子ども食堂では実際のターゲット層とは異なるものの、それを受け入れ
地域の高齢者の交流の場となっている。語りから、高齢者の方が子ども食堂を楽しみにし
ていることが分かったが、前川さんの理想は子どもと高齢者の方が食べながら交流するこ
とだという。高齢者と子どもが交流する機会が少なく、高齢者が子どもがうるさいと思う
のも、普段子どもに関係していないからそう思うのではないかと語っていた。

第3項 まとめ

本節では、子ども食堂における地域共生の側面についてみてきた。地域に開かれた子ども食堂では、子どもに限らず様々な人が集まり交流が行われていると考えられる。しかし、芝園子ども食堂では子どもと高齢者が交流することが理想という語りがあるなど、多世代交流にはまだ課題があることも感じる。

第7節 運営における課題

これまでの節では子ども食堂が果たしている役割などについて触れてきたが、本節では現在各子ども食堂が抱えている課題、今後出てくると考えられる課題についてみていく。

第1項 オタヤこども食堂の課題点

現在、スタッフの数は比較的集まっているものの、今後自分達が続けてきた子ども食堂を引き継いでやっていってくれるようなスタッフがいらないことを高澤さんは課題として挙げていた。一方で、田辺さんは「私は難しいかなと思ってる、やっぱりいろんな意味で、あのたいしたこともないけど、責任感を持つようにならないといけないだろうし、お手伝いはどれだけでもするけどそこまでは出来ないわという人のほうが多い。」と語っている。

また、新型コロナウイルス流行禍においては、人が集まりすぎてしまうことが課題であると語っていた。オタヤ子ども食堂は、御旅屋セリオで開催しており万が一子ども食堂内で感染者が発生した場合、今後の運営が難しくなることが考えられるため、ポリシーの1つとして「絶対に断らない。」があるものの、コロナが収まるまでは人数制限をすることをインタビュー調査時点で検討していた。(2020年12月26日の開催は150食限定での運営に。)

第2項 にながわふれあい子ども食堂の課題点

多くの子ども食堂で課題となっているのが、来てほしい家庭の子どもや親達に子ども食堂に来てもらうことだ。にながわふれあい子ども食堂でもその点を課題の1つとして挙げている。この課題に対してにながわふれあい子ども食堂では、民生委員や学校と協力をすることで向き合っている。まず民生委員と協力して行っていることが以下である。

田畑さん：民生委員さんと協力して、民生委員さんにちょっと個別で、そこのおうちだけに配布するのは周りからおかしいなって思われたら嫌だから、そこのおうちの周り周辺のおうちにこのポスターを直接ポストインしてもらうとか、なんかそんな風なことを今しています。

個別的な情報を知り得ない子ども食堂での活動においては民生委員と協力することで、情報を広めていくことが可能になると考えられる。この活動に関しての課題として「やっぱりそこだけに、その家庭だけにしているって、その家庭自体は何も思われたくない。」と語っており、周辺にも声をかけるなどし、配慮しながら活動しているという。また、本項の最初で触れたように学校との協力も行っている。先生達にご飯を十分に食べられていない子どもに対し声をかけて、子ども食堂にご飯を食べに来てくれることもあるという。

これらから、民生委員の方や学校の協力を得ながら、課題解決に向けて取り組んでいることが分かる。子ども食堂の単独の活動ではなかなか難しいことも様々な人や機関の協力を得ることが出来れば可能になるのではないかと考える。また、にながわふれあい子ども食堂では、子ども食堂の活動の他に食材配布の活動をしており、子ども食堂の活動が直接的な個別の支援に繋がる事もあると考えられる。（食材面、人の繋がり等の面等。）また、他の課題面では人数が増加したことで生じている待ち時間の面でも課題を抱えていると語っていた。コロナ禍においては会食可能な人数を減少していることで、待ち時間が増えるといったこともある。

第3項 芝園子ども食堂の課題点

現状の運営に対しての課題はコロナに関する不安であった。また、語りの中では対象としている子どもの数が少ないことについても悩んでいるといったようなものがいくつかあった。高齢者の数が多くなっていることに対して、それはそれで良いというような考えを持っている一方、シングル家庭などの子ども食堂開設のきっかけとなったような家庭にはなかなか届いていないのではないかという悩みを語っていた。そういった思いがあるが、実際にどうすれば子どもにアプローチ出来るのか分からないとも語っていた。

また、スタッフの平均年齢が70歳前後であることから、今後についてどう考えられているのか聞いた所、以下のような返答があった。

浅野：まだ具体的にね、今後いつ辞めようとかどうしようとかっていう話は出てないけど、やがてそういう話も出てくるんじゃないかと。

前川：そうそうそう。もう続けられないねっていう前に、若い50代60代の人方に入ってもらいたいかなと思う。

原田：渡していきたいというか。

前川：うん。まず、この場所があればね。私がいなくてもやってってもらえばいいし、だけど、意外とね米も貰うからやろうと思えば出来るんだよね、ここ。うちのせきのやが手を引いたとしても、この場所だけ貸してって。だから、そこで若い人が育てくれるためにはどうしたらいいかなと思って、どうやって手渡したらいいだろうって思うのがあるのと、やっぱり続けていきたい。こんだけお客さんがいるんだったら、続けていきたいなっていうのはあるし、もうちょっとほんとに大事な子ども達に満足してもらえる渡し方って無いかなって思ったり。

子ども食堂の運営に対して、続けていきたいという気持ちがある一方でどうやって次の世代に手渡していくことが出来るのかについては不明瞭である。

第4項 がんかいじこどもしょくどうの課題点

現在の運営課題についての回答が以下の通りである。

村上：うーん、運営費、ボランティアスタッフ、それとまあさっきも何回も出てきてますが、参加者の広がり、停滞、それとまあ個人的には仕込みが大変（笑）もうちょっと楽に仕込めたらいいのになあ、どうしたらいいのかなあと思うことがあります。

参加者の広がり、停滞については、コロナの影響によるものもある。毎回参加してくれる人がいることは嬉しさである一方、固定化はある意味怖いと感じるというが、コロナの中で動きようがないと語る。

原田：確かに。新しい人を増やしたいは増やしたいけれどもやっぱりちょっと不安みたいなことは大きいですね。

村上：そうそうそう。だからもうこの1年ちょっとは、例えば前だったら、コンビニにチラシ実際には貼ってくれてなかったとしても、コンビニにチラシ貼ってくださいとか、してたんですけど、ちょっとそういうのも今コロナなので。っていうので控えたりしていますね。なので、おのずと新しく来る方少なくて、いつものメンバーみたいな感じかなと思います。

また、がんかいじこどもしよくどうは予約制にはしていないため、当日にならないと何人来るかが分からない点で、急激な人数の増加には人手やご飯の面で対応が追い付かないことがある。

第5項 まとめ

第1項から第4項まで、各子ども食堂の課題についてみてきた。人材、情報、運営費など様々な観点で課題を抱えており、課題点は各子ども食堂で共通する部分がある一方、異なる部分もあった。課題点に関しては、解決策が考えられるものもあれば、なかなか難しいものもある。

第6章 考察

第1節 子どもの貧困対策としての機能

子ども食堂は子どもの貧困対策として注目を集めてきた。湯浅（2019）は月に1～2回の子ども食堂の開催では、経済的貧困対策としての子ども食堂は無力であるとしながら、子ども食堂は「つながり」をつくる点で「心の貧困」対策となっていると指摘している。今回の調査においても月1～2回の開催である子ども食堂が全てであり経済的貧困対策としての力は弱いと感じる。しかし、子どもにご飯を提供している時点で子どもの経済的貧困に対し全く寄与していない訳ではないと考える。また、湯浅も述べるように子ども達の心の貧困対策として子ども食堂は機能していると考え。貧困対策としての子ども食堂を考える上で、今回の4箇所の子どもの食堂調査においてポイントとなると考える点が以下の2点である。

- ①生活困窮家庭の子どもに対象を限定している子ども食堂（ケア付き食堂）ではなく、どんな子どもでも参加出来る子ども食堂である点。
- ②参加者の個人的な詳細な情報を取得していない点。（コロナ禍において仕方なく情報を得るようになった場合はあった。）

これらの点は、生活困窮家庭の子どもに絞った運営をしていない子ども食堂であるからの特徴であると考えられる。そういった運営にしている理由は、大きな理由として専門的なスタッフもおらず、民間の一般人が善意で行う無償ボランティアであるため、必然的に専門的にケアをしていくことは難しい点や、子どもの貧困対策としてだけではなく、地域の交流拠点として開催しているためなどの理由が挙げられる。しかし、生活困窮家庭に限った運営をしていない子ども食堂だからこそ生まれるメリットがあると考え。まず、①対象とする子どもを限定していない点に関しては、子どもの抱える問題が経済的な貧困に限らない点において、必要なことであると考え。また、広く門戸を開くことで課題を抱えている子どもに気付くことが出来るといった可能性もある。②の点に関しては不用意に個人情報を得ないことで情報流出のリスク管理が可能になる事や、参加者が気軽に子ども食堂に参加出来るというメリットがある。このように、子どもの対象者を絞って運営していない子ども食堂故のメリットがある。しかし、その中でも貧困との繋がりが皆無な訳では無い。各子ども食堂のきっかけや印象的な出来事の中には、経済的な貧困を抱えた子どもや孤独を抱えた子どもに関する語りがいくつもあった。運営者の想いの中には、「子どもにお腹いっぱい食事を食べさせたい。」というものがあり、深い継続的な支援は難しい一方で、一時的ではあるものの美味しいご飯を食べることが出来、安心して過ごせる空間を作ることには出来ているのではないかと考える。また、経済的な貧困だけではない子どもの「心の貧困」に対し、食や人を通じ様々な経験が出来る場となっているのではないだろう

うか。従って、富山県内の子ども食堂は、生活困窮家庭に絞った運営はしてはないが、子どもの貧困に対し、一定の役割を果たしているのではないかと考える。

第2節 子どもの居場所、子育て支援機能

本節では、子どもの居場所や子育て支援機能についてまとめる。

第1項 子どもの居場所

本項では、七星（2019）と阿部（2020）の主張を用い、子ども食堂における子どもの居場所機能についてみていく。七星（2019）では子ども食堂がこれまでの子どもの居場所と異なる点として、「食」という生活の部分を提供している点を挙げており、子ども食堂は、食を通じた生活支援の場であり、豊かな経験や多世代との交流をもたらす居場所であると論じていた。また、阿部（2020）においても子どもの居場所機能が挙げられており、子ども達がホッと出来る空間であり、学校や勉強、家庭のことに関係なく気かけられ自分のことを承認される空間になっていると論じている。

今回の調査においても子どもが1人で来ても安心して過ごすことが出来る場所になっていることを確認した。また、食事を提供するだけでなく、子どもが遊べるスペースや勉強出来るようにしていた子ども食堂もあった。子ども食堂を毎回楽しみにしている子どももおり、食事が出来、様々な人と話したり、遊べる場所である子ども食堂は子どもの居場所となっていると考えられる。上述したように、阿部は自分のことを承認される空間と述べている。今回の調査ではそこまで確認することは出来なかったが、少なくとも否定されない、ここにも大丈夫と子どもが思える空間にはなっていると考えられる。

調査した子ども食堂の中には、今よりも子どもが遊べる場所を作ったり、待ち時間などで勉強が出来るようにしたいという気持ちがあるものの、スペースが無かったり、スタッフが食事を提供することで手一杯などの理由から、なかなか出来ない状態であることも分かった。「子ども食堂」であるから、「食事」が1番大切に中心となる取り組みであることは確かであるが、地域のニーズや開催場所の環境に合わせて、「食事」プラスアルファの取り組みがなされていくことでより子ども食堂という場所が子ども達にとってはもちろん、親や地域住民にとっても魅力的な場所になるのではないだろうか。

第2項 子育て支援機能

湯浅（2019）では子育て支援機能について指摘しており、阿部（2020）においてもこの湯浅の指摘を用い子育て支援機能があることを確認している。

まず、子ども食堂は子どもにご飯を提供する点で、子育て家庭にとって子育て支援機能を担っていると考えられる。今回調査したにながわふれあい子ども食堂は、第31回富山県ふるさとづくり賞の子育て支援活動部門において大賞を受賞しており、子ども食堂が子育て支援機能を持っていることを確認出来る。子ども食堂には子どもだけでなく子育て中のお母さんなども参加しており、子ども食堂において新たな知り合いが増えることや、子育て中の悩みなどに関して気軽に相談し合えるような雰囲気があることも考えられる。参加しているお母さん達の中には、友達同士で参加している場合もあり、子どもがいても安心してご

飯が食べられ話を楽しめる場所になっているとも考えられる。

子ども食堂の実施者側からの直接的な支援の働きかけは基本的にどの子ども食堂も行っていなかったが、相談を受けた際には、相談に乗るといったようなことも語られていた。支援に特化した子ども食堂でなくとも、支援の入口になることは出来ると感じる。

第3節 地域共生を実現する場としての機能

第1節及び第2節は、今回調査した子ども食堂において多少の意識の差はあるものの、共通している要素であった。本節では各子ども食堂によって異なっていた子ども食堂の地域共生・多世代交流という観点に着目する。

多世代交流拠点としての子ども食堂の機能として湯浅（2019）は高齢者の健康づくりを挙げている。また、阿部（2020）においても子ども食堂は、高齢者の生きがい・健康づくりに資する点や地域共生を実践する場としての機能があるとしている。

子ども食堂は比較的幅の広い活動であるため、子ども食堂によってその特性は異なっている。今回の調査においても、この多世代交流・地域共生機能の観点に関しては強く意識している子ども食堂もあれば、あまり意識していない子ども食堂もあった。

地域共生を意識している子ども食堂においては、地域のお年寄りがやって来ることもあれば、小学校の先生がやって来ることもあった。にながわふれあい子ども食堂のフィールドワークにおいては高齢の女性が、子ども食堂が外に出る機会になり、若い人と会話する機会になると話していた。また、交流は子ども食堂にやって来る人達の交流に限らない。ボランティアスタッフにおいてもその地域の中で多く構成され、子ども食堂の運営を通し、地域の中での交流が行われている。調理の方法や子どものことなど、様々な会話がなされていた。第5章・第1節・第2項で見たように、子ども食堂開設のきっかけには子どもの貧困以外にも地域の繋がり希薄化がある。にながわふれあい子ども食堂の田畑さんは、子ども食堂の研修会において講演を行った際、地域において笑顔で挨拶が出来る人を増やすことが出来る場所にしていきたいと語っている。子ども食堂は子どものための活動でありながら、地域の繋がりを生み出し、地域を明るくする存在にもなり得ると考える。

子ども食堂は「食事」という誰が必要とするもので、生きていくのに欠かせないものが中心となっている。食は、どの世代の人にとっても身近で必要なものであるからこそ、豊かな会話が生まれ、多世代の交流が可能な場所になっているのではないかと考える。

第4節 現在・今後の課題

ここまで、子ども食堂における様々な機能に着目してきた。今回調査を行った4箇所の子ども食堂はいずれも2年以上継続して運営しており、子どもや地域にとって一定の成果を挙げていると考えられる。一方で、各子ども食堂に運営課題がある。本節では、阿部（2020）において指摘されていた3つの課題点ごとに見ていく。

第1項 人材不足

まずは人材不足についてである。先行研究の阿部（2020）では、ボランティアの不足や高校生・大学生をはじめとする若者の参加、子ども食堂を企画・運営・管理する市民リーダーの存在やその養成場所が少ないことが課題として挙げられていた。

今回の調査においても人材に関する課題が挙げられた。オタヤこども食堂と芝園子ども食堂では、運営を引き継ぐ人材への不安が挙げられた。にながわふれあい子ども食堂やがんかいじこどもしょくどうについては、後継の問題は出ていないが、全体的なスタッフの中に若者が少ないことや、なかなか若者のボランティアと繋がるのが難しいことが分かった。前者の後継者問題に関してはなかなか解決が難しい問題であると考えられる。運営を引っ張るには責任感と信念が必要とされると考えられ、想いを引き継いでいくことはたやすいことでは無いと考える。また、後継について行政が関与することも難しいと考える。子ども食堂と一概に言っても目的意識や運営形態は個々の子ども食堂によって異なることに加え、行政は個々の子ども食堂に関して関与していない点から、行政が立ち入ることは難しいと考える。しかし、この後継者問題は今回調査を行った子ども食堂に限らず、多くの県内の子ども食堂で発生してくる問題であると考えられるため、解決のための何らかの策を考える必要はあると感じる。若者の活動参加に関しては、子ども食堂の活動は若者にとっても社会参加・社会貢献となる活動であるため有意義であると実際にボランティアとして参加し感じた。県内にも高等教育機関がいくつかあることから、学生ボランティアに関しては何かしらの策は立てられるのではないかと考える。

先行研究が挙げた、子ども食堂を企画・運営・管理する市民リーダーの存在やその養成場所が少ないことに関して改善策が求められると今回の調査においても感じた。今回行ったインタビュー調査の中で、自身が立ち上げる力は無かったけど、地域の中で子ども食堂をやりたいという人がいたら手伝おうと決めていた人や、子ども食堂を立ち上げたいけれど、何からすればいいのか分からない人がいることが分かった。ボランティア活動である子ども食堂は人材がとても重要である。やりたい人、支えたい人が子ども食堂を運営出来るようにサポートすることが求められる。

第2項 財源不足

次に財源不足についてまとめる。阿部（2020）は財政支援として企業や個人、国や自治体による助成金が広まっているものの、期間が限定されているものが殆どで助成期間終了

後の子ども食堂の活動の継続が 1 つの鍵となるとしている。活動継続には支援が必要であり、各子ども食堂の自由な活動を阻害しない形で活動経費が保障されることが望ましいとしている。

今回調査した 4 箇所の子ども食堂においても民間の一般人が無償で行っている活動であるため、子ども食堂の活動費を得ることは非常に大切になってくる。いずれの子ども食堂においても、初期費用は個人や地域住民の寄付から捻出している。県の子どもほっとサロンネットワークでは、初期費用に関して経費の助成を行っているが、年 24 回以上の開催という条件を設定している。ネットワークに加入している子ども食堂において、月 2 回以上の開催は半数以下であり、インタビューを通してボランティアの活動である以上、月 2 回の開催はかなり大変であることが分かった。子どもの居場所としての側面を重視するためにも県は年 24 回の条件を設定しているが、なかなかハードルが高いと考えられる。初期費用の難しさはあるものの、今回調査した 4 箇所の子ども食堂はいずれも 2 年以上継続して運営をしている。これは、各子ども食堂実施者の強い思いや継続努力はもちろんのこと、運営を続けることで情報が広がり、個人や企業からの寄付が集まるようになってきていることも要因となっていると考えられる。新聞やテレビのメディアの取材を通し、子ども食堂の存在を知った人が寄付を行う場合や、SNS を通じた寄付がある場合もあった。また、県のネットワークを通して寄付が行われることもあり、ネットワークに加入している場合はそういった流れで寄付金や物資を受け取る場合もあった。県のネットワークが寄付の橋渡しとなることで、寄付がスムーズに行われたり、新たに子ども食堂の情報が広まるきっかけになるのではないかと考える。

第 3 項 情報不足

情報について、阿部（2020）は各地域及び全国規模のネットワークが整備されつつあるとする一方で、農林水産省が行った子ども食堂向けアンケートにおいて、個別の子ども食堂の課題のトップに「来てほしい家庭の子どもや親に来てもらうことが難しい」ことが挙げられていることを指摘している。個人情報を持たない各団体がその確認を行うことは難しく、個別の声掛けは学校・福祉関係機関が積極的に行い、各団体との連携を深めていくことが望ましいとしている。

富山県においても県子どもほっとサロンネットワークが設立されており、情報交換や情報共有される場が整備されていると考える。一方で先行研究でも述べられていたように、アンケート調査に回答した県内の子ども食堂の殆どが「来てほしい家庭の子どもや親達に子ども食堂に来てもらうこと」を課題として挙げていた。にながわふれあい子ども食堂では、その課題に対し対策を考えていたが、情報を広めることはなかなか難しく、特に子どもに情報を広めることは難しいと感じる。田畑さんが蜷川小学校の総合的な学習の授業で子ども食堂の話をしに行った際、クラスの 7 割程度が子ども食堂を初めて聞いたと手を挙げたという。小学校には、毎月ポスターを掲示して貰っていたというが、その時周知され

ていないことを実感したという。にながわふれあい子ども食堂では、SNS を利用した広報を行っているが、子どもにはなかなか伝わっていかない。SNS を利用する大人に対し、子ども達に情報を広めていくことが困難であると感じる。一方、SNS の利用は他の課題に対しての対策となる。寄付をしたい企業やボランティアに参加したい大人、課題を抱えており相談したい人などにとって、子ども食堂の SNS があることは、子ども食堂運営者にとっても利用者にとっても有意義なことであると感じる。また、正しい情報を発信する点においても有効であると感じる。「子ども食堂」という活動に対して、誤った理解がされないためにも、正しい情報を発信していくことは必要である。広報にお金をかけることが難しいボランティアの活動であるからこそ、誰でも無料で利用することが出来る SNS を利用した情報発信は有効であると考えている。

第5節 多様な子ども食堂と今後の展望

今回の調査では、4箇所の子ども食堂運営者に対し開設のきっかけや、実際の運営状況などについてインタビューを行った。今回の調査結果を湯浅（2017）の類型に当てはめると、生活困窮家庭の子どもに限定していない点や、スタッフが専門家でない点などから4箇所全て共生食堂寄りであると考えられる。しかし、その共生食堂の中にも2通りあると考える。1つは子どもとその保護者に限定した共生食堂、もう1つは地域住民も参加可能な共生食堂である。今回の調査では、オタヤこども食堂とがんかいじこどもしょうどうが前者で、にながわふれあい子ども食堂と芝園子ども食堂が後者である。

このように子ども食堂を簡単な類型に当てはめることは可能であるが、インタビューやフィールドワークを通し、子ども食堂が多様であることを強く感じた。もちろん、「子どもがご飯を食べられる場所」であることや立ち上げのきっかけには共通点がある。しかし、実際に詳細な話を聞いたりボランティアとして子ども食堂に参加するとそれぞれに違いがあり、それぞれの良さがあることに気付かされた。例えば、幼児とお母さんの参加が多いオタヤ子ども食堂では特に子育て中のお母さん達の交流の場として機能していたり、子ども1人での参加が多いがんかいじこどもしょうどうでは、子どもが遊んだり勉強が出来たりし、子どもの居場所としての機能が大きいと感じる。このように、各子ども食堂が持っている特色が異なっていると感じる。子ども食堂の運営方針や運営形態が多様であることは、間違った理解をされることにつながり、必ずしも良いことであるとは言えないかもしれない。しかし、定義や制限が無いことで、運営者が作りたい子ども食堂を目指すことや、各地域に合った子ども食堂を開くことが出来るのではないかと考える。

また、インタビューを通し子ども食堂をやりたいと考えていても、開催場所が無いことや地域住民の反対により、なかなか始めることが出来ないという人があることも分かった。子ども食堂の全体数は増加しているものの、全国比で見ると富山県はかなり少ない。貧困率が低い富山県であるが、子どもの抱える問題は経済的貧困だけでないことは本論文でも取り扱ってきた。また、必要な支援からこぼれ落ちている子どももいるかもしれない。子ども食堂は子どもの貧困に対して機能するだけでなく、関係性が希薄化しつつある地域の繋がりを再び作ることが出来る活動であると考ええる。

注

1、子どもの貧困率…中間的な所得の半分に満たない家庭で暮らす 18 歳未満の割合
(2018 年の貧困線 (等価可処分所得の中央値の半分) は 127 万円)

2、例外的な形とされる A 型、C 型は以下のようにまとめておく。

A 型…子ども食堂としては非常にレア。フードドライブやイベントによって地域の雰囲気
を高めたいという場合が考えられるが子ども食堂と名乗るケースは少ない。

C 型…D 型の派生形として捉えられる。「本当は貧困家庭の子に来てもらいたい、そうす
ると貧困家庭の子が来づらくなるため誰でもどうぞ」としているタイプ。

3、新型コロナウイルス流行禍において、会食形式での開催が見送られた際、地域のお店
で作られたお弁当を配布した場合はあった。

参考文献・URL

- ・朝日新聞、2016 年、「「子ども食堂」全国に 3 0 0 カ所 開設急増、半数が無料」
(https://www.asahi.com/articles/ASJ6G0PCCJ6FPTFC036.html?iref=pc_extlink 2021 年 9 月 6 日取得)
- ・阿部未央、2020 年、「複合機能をもつ「こども食堂」と社会福祉」、山形大学法政論叢 = YAMAGATA UNIVERSITY THE JOURNAL OF LAW AND POLITICS (73)、105-151
- ・田辺和俊、鈴木孝弘、2018 年、「都道府県の相対的貧困率の計測と要因分析
The Estimation of Prefectural Poverty Rates and the Elucidation of their Determinants」、日本労働研究雑誌、60(2・3)、45-58
- ・富山県、2021 年、「富山県内の子ども食堂」
(http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1201/kj00021733.html 2021 年 9 月 5 日取得)
- ・富山県、2021 年、「とやまっ子エールごはん緊急支援事業費補助金のご案内」
(<https://www.pref.toyama.jp/1201/kurashi/kyouiku/jidou/kj00022138.html> 2021 年 9 月 5 日取得)
- ・内閣府、2014 年、「子どもの貧困対策の推進に関する法律の施行について」
(https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/hinkon_law_tsuuchi.pdf 2020 年 9 月 23 日取得)
- ・内閣府、2021 年、「子どもの貧困対策」、(<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/> 2021 年 11 月 14 日)
- ・日本経済新聞、2020 年、「子どもの貧困率 13.5% 7 人に 1 人、改善せず」
(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO61680420X10C20A7CR8000/> 2021 年 11 月 14 日取得)
- ・農林水産省、「子供食堂向けアンケート調査結果」
(<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/syukeikekka.pdf> 2020 年 11 月 5 日取得)
- ・農林水産省、「アンケート調査票」(<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/shitsumonshi.pdf> 2020 年 11 月 5 日取得)
- ・七星純子、2019 年、「「子ども食堂」と「居場所」論」、千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 = Chiba University Graduate School of Humanities and Study of Public Affairs Research Project Reports、345、13-28
- ・むすびえ (NPO 法人全国子ども食堂支援センター)、2020 年、「それでも増えた！こども食堂こども食堂全国箇所数調査 2020 結果発表のおしらせ #こども食堂の 2020 年」
(<https://musubie.org/news/2898/> 2021 年 1 月 18 日取得)
- ・湯浅誠、2017 年、『「なんとかする」子どもの貧困』KADOKAWA
- ・湯浅誠、2019 年、「多世代交流拠点としてのこども食堂」
(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20191214-00154123> 2021 年 9 月 6 日取得)